



被爆体験講話

1日目(8月8日)の青少年ピースフォーラムでは、実際に長崎で被爆された三瀬清一朗さんによる被爆体験講話が行われました。三瀬さんの当時の体験談を掲載いたします。



Profile 三瀬 清一朗さん

1935年(昭和10年)2月26日生まれ。

10歳のとき、爆心地から3.6kmの屋内で被爆。

「長崎平和推進協会」の継承部会に所属し、被爆体験講話者として活動されています。

戦時下の日常と、運命の瞬間

1945年、私は国民学校の5年生(10歳)でした。私の人生の土台は、まさにこの戦争体験にあります。学校では勉強よりも、「爆弾が落ちたらどうするか」という訓練ばかり受けていました。「親指で耳を塞ぎ、残りの指で目を覆って、地面に伏せる」。この動作を来る日も来る日も練習させられていたのです。

運命の8月9日、長崎の天気は快晴でした。午前中に一度空襲警報が出ましたが解除され、人々は日常に戻っていました。

11時2分、私は自宅でオルガンを弾いて遊んでいました。B29のエンジン音を真似て「ブーン」と音を出していると、祖母が飛んできて「敵機が来たからやめなさい!」と叱られました。私が渋々オルガンの蓋を閉めた、まさにその瞬間でした。

「ピカッ」

太陽が落ちてきたかと思うほどの強烈な閃光が走りました。私はとっさに訓練通り、目と耳を塞いでオルガンの前に伏せました。たまたま壁の陰にいたことで、窓ガラスの破片を浴びずに済みました。もし窓際にいたら、私は助かっていなかったでしょう。生死は本当に紙一重でした。

破壊された家と「黒い雨」

爆心地から約 3.6km 離れた自宅には、閃光から約 10 秒後に凄まじい爆風が到達しました。「ドーン」という轟音と共に、家中のガラスが割れ、畳が床から吹き上げられました。しばらくして顔を上げると、棚の上にあった時計や花瓶はすべて消え失せ、家の中は爆風で運ばれた砂煙で満たされていました。母は半狂乱になって、子供たちの名前を一人ひとり呼びました。幸い、家族 8 人全員がタンスや壁の陰にいて無事でした。「誰も怪我しとらんね、助かったね」と泣き崩れる母の姿は、今でも忘れられません。

外に出ると、空は不気味に暗くなり、やがて「黒い雨」が降ってきました。当時、半ズボン一枚で遊んでいた私は、その雨が放射能を含んでいるとは知らず、ただ呆然と眺めていました。遠くには巨大なきのこ雲が広がり、夕方には再び米軍機が飛来したため、私たちは恐怖に震えながら防空壕へ逃げ込みました。

救護所と化した体育館

数日後、私が通っていた学校へ行くと、そこは地獄のような光景に変わっていました。学校は救護所に指定されており、爆心地近くで被爆した人々がリヤカーで次々と運ばれてきていました。皮膚が焼けただれ、服はボロボロになり、もはや誰が誰だかわからない状態の人々が、体育館の床に隙間なく並べられていました。

「水をください……水を……」

多くの人が弱々しい声で水を求めています。しかし、「水を飲ませると死ぬ」と言われていたことや、そもそも水も薬もなかったため、誰も何もしてあげられません。やがて「殺してくれ」という悲痛な叫びに変わり、そして静かになっていきました。

亡くなった方は、大人たちが手足を持ってグラウンドへ引きずり出し、廃材の上に乗せて焼いていきました。本来、子供たちが元気に走り回るはずのグラウンドは、8月の終わりまで死体処理場となり、煙が立ち上り続けました。

終戦の解放感と、悲しみの新学期

8月15日、祖母から「日本は負けた」と聞かされました。祖母は「悔しかねえ」と涙していましたが、正直なところ、10歳の私は「嬉しかった」のです。「明日からはもう爆弾が落ちてこない」「安心して眠れる」。4年間の戦争生活から解放された喜びは、何にも代えがたいものでした。

しかし、2学期の始まりは残酷なものでした。久しぶりに登校した私たち5、6年生に命じられたのは、グラウンドの整備、つまり「遺骨拾い」でした。完全に焼けきれずに残った人間の骨を素手で拾い、箱に収めていくのです。

教室に戻って出席をとると、名前を呼ばれても返事がない友人が何人もいました。「先生、〇〇君は?」「原爆で亡くなりました」。

私たちの新学期は、そんな悲しい報告から始まりました。

飢えとの戦いと生活の知恵

戦後は平和になりましたが、待っていたのは極度の食糧難でした。男手がないため畑も作れず、私たちは常に腹ペコでした。

学校から帰って「母ちゃん、腹減った」と言っても、「動かずに寝ていなさい」と言われるだけ。私たちは生きるために必死でした。山に入ってドングリや椎の実を拾い、炒って食べました。川の石をひっくり返してサワガニやドンコ（魚）を捕まえました。蜂の巣を見つけては煙でいぶして蜂を追い払い、中の幼虫（蜂の子）を焼いて食べました。当時はそれが最高の栄養源で、とても美味しく感じたものです。

この経験から、私たち世代は「一粒のお米も粗末にしない」という習慣が染み付いています。また、いつ空襲があっても逃げられるよう、寝る時に服を着る順番に並べておくといった「整理整頓」の習慣も、戦争体験から学んだ生きる知恵でした。

差別を超えて、核なき世界へ

戦後何年も経ってから、私たち被爆者は新たな苦しみに直面しました。それは「差別と偏見」です。結婚の時期になると、「被爆者と結婚すると奇形児が生まれる」という根拠のない噂が流れました。実際に、被爆者であることを隠して結婚し、後でバレて離婚させられた人もいました。私自身、子供や孫への放射能の遺伝的影響に対する不安は、80年以上経った今も消えていません。

それでも私は語り続けます。2017年に核兵器禁止条約が採択されたことは大きな希望です。私たち被爆者の願いはただ一つ、「核兵器のない世界」を見届けることです。あの地獄を二度と誰にも味わわせてはいけません。そのために、私は生きている限り、この体験を伝え続けていきたいと思っています。

平和への願いを込め、キャンドルに 絵とメッセージを書きました



◎キャンドル絵付け

長崎ピースフォーラム等が主催する、平和への願いを込めてキャンドルに絵やメッセージを描く参加型プログラムです。完成したキャンドルは、毎年爆心地公園等で開催される「平和の灯」会場にて点灯されます。無数の灯りが並ぶことで、一人ひとりの追悼の祈りと平和への思いが可視化され、幻想的な光景を作り出します。参加者の手による灯りを通じて、核兵器廃絶と恒久平和を国内外へ発信する重要な役割を担っています。

－長崎インタビューレポート－

中学生・高校生の団員9名は平和祈念式典会場で来場者にインタビューを行いました。質問項目、質問対象者などは各グループで自由に設定しました。

沖山団員・千葉団員・原団員・大志民団員



◆質問内容◆

- Q 1. どこから来たのか。
- Q 2. どんな目的で式典に参加したか。
- Q 3. 核兵器・戦争・平和に対する意見。

◎ I 組目

A1	広島県
A2	広島・長崎の青年交流(昭和24年～)のため。
A3	反対を貫く。ぜひ広島・長崎に来て当時の現状を見て欲しい。

◎ 2 組目

A1	大分県豊後大野市
A2	平和と戦争を学ぶため。被爆者のお話をきくため。
A3	けんかをしないこと・しているところを見かけたら止めることで、平和に繋がると思う。

◎ 3 組目

A1	佐賀県
A2	平和宣言と石破総理の演説をきくため。
A3	核兵器は世界中に約 12340 発ある。アメリカ 5000 発、ロシア 5000 発。それを 1 つ 1 つ落とす地名を言えるのか。5000 発も持っていてどうするのか。

大塚団員・大澤団員・相川団員・徳留団員・織戸団員



◆質問内容◆

- Q 1. この式典には毎年参加しているか、参加のきっかけは何か。
- Q 2. 長崎という街をどんな風を感じているか。
- Q 3. あなたにとって平和とは何か。

◎ 1 組目

A1	被爆者のお話をきくために、原爆を知らない子ども達となるべく毎年参加するようにしている。
A2	綺麗な街だと思う。
A3	事件や戦争がないこと。

◎ 2 組目

A1	始めてきた。日本にも初めて。(ドイツの方)
A2	美しい町だと思う。開発が進んでいると思った。
A3	自由であること、争いがないこと。

◎ 3 組目

A1	毎年参加している。
A2	唯一の被爆地であり、戦争自体が起きた地である。
A3	暴力では解決しない、戦争に勝ち負けはない。残るのは人間の愚かさ。

長崎派遣を終えて



習志野市へ帰ってきてから、各グループに分かれ、
長崎で学んだことをまとめました。



大澤団員・千葉団員・大塚団員によるまとめ

〔長崎原爆資料館について〕

〈長崎に落とされた原爆について〉

名称: ファットマン

重量: 4672kg 長さ: 約3m

死者: 約70000人 全焼全壊: 約一萬棟

広島より威力は大きかったが土地によ
て被害は軽減。



〈展示物について〉

◦ 永遠の11時02分

原爆投下時の時刻を示したまま、
その時計は、永久に止まっている。
我々はこの時間を継承しなければ
ならない。

◦ 強大な熱

資料館には互のように多くの溶けたり、変形
した瓶、ガラスや高熱により穴の空いた石などが
展示されている。

どれほどの威力が容易に見て取れる。

☆ 資料館に訪れた感想

我々、平和市民団の多くが最も印象に残った
場所として資料館を挙げました。それほどに
原爆の威力を表していたと思います。みなさん
にもぜひ訪れてもらいたいと思います。

大澤 咲団員
千葉 光葵団員
大塚 滉斗団員

平和の象徴千羽鶴



↑ 吊るした鶴の団員の様子
 によって折ら
 らせています。
 私達が
 代表して吊
 らせていただ
 きました。

これらの
 千羽鶴はこの
 活動に関わっている人
 まで主人に



号外
 平和新聞

被爆当時の地層

② 地層の写真



原爆落下中心地には
 あたるこの地層には、
 原爆にあって壊された
 家の瓦やレンガが熱に
 て焼けた土などが
 現在でも大量に埋没
 していて、被爆当時の
 悲惨な実相を示して
 います。②

爆風に崩れ落ちた鐘楼

爆心地から、
 約五百メートルの
 位置にあった天主堂
 の双塔のうち南側
 の鐘楼ドームは天主
 内に落下し、北側の
 小川まで滑落ち
 ました。③



③ 滑落ちた鐘楼ドームの写真

8/15(日)

制作者

徳留大希
 相川和来
 織戸紗代

感想

被爆当時の地層から当時の長崎市民の方でも私たちと同じ生活をしていて、原爆により、その生活も一瞬にして壊れてしまったと思ふと、月日が溜く+27年経ちました。

沖山団員・原団員・大志民団員によるまとめ

山王神社・長崎大学について



○二の鳥居

残った柱が重心を保ち
80年経っても立っているのは
上部が爆風によって折れた
からだと考えられている。

柱の一部が熱線によって溶けていた。

メンバー

沖山隼人

原花蓮

大志民葵

○1日・長崎医科大学 旧正門

一本が傾いていて、一本は垂直に立っている。

爆風を受け9cmずれ、16cm浮いている。

垂直な方は崖があたため傾かなかった。



○被爆ワスノキ

被爆した際に幹が折れ、枯れてしまっただけ
ではないと言われているが、新芽を吹いて、長崎市民
にとりての希望となった。

セメントのようなものは治療の跡。爆風の
影響で、中に石が入った。

感想

沖山 遺構に残された爪痕を見て、平和は尊いものゝ改めて感じた。
原 現在の長崎の街並みの中にも被爆当時のものが残っていて、現在の過労を再び架け橋のようでした。
大志民 神社や大学を目近で見ると、原爆や戦争の悲惨さを突感した。

長崎派遣を終えて

習志野市原爆被爆者の会 岡田 千砂子

久しぶりの長崎は、一日に「暑い」という言葉を何度言ったか分からないほどの暑さと湿気に悩まされるものだった。そんな中文句も言わず強行軍をこなす生徒たちに、必死についていく三日間となった。初日はまず、「青少年ピースフォーラム」の会場へ。全国から集まった若者たちにご自分の体験を話してくださったのは10歳で被爆した三瀬清一郎さん。母は洗濯、祖母は食事の支度という当たり前の日常は、一生忘れない記憶となった。私の知る被爆者の方と近所のように光景が目浮かぶ。小学校が再開し「生きていたことが一番の喜び」と思ったものの、その後に待ち受けていたのは食糧難、へび苺、蜂の巣などなんでも食べたとの事。祖母、兄、姉二人をがんで亡くす。戦争で一番傷付くのは子供とおっしゃる三瀬さん、平和とは「コミュニケーションが大事」ではないかとの事、大事な事を学ばせていただいた。翌日は平和祈念式典。式典開始までの大雨が嘘のように止む。長崎市長が切々と訴える。「あの日から80年を迎える今、こんな世界になったと誰が想像したでしょうか」「武力には武力の争いを今すぐやめてください」。会場にいた関係国の大使の耳には響いたのだろうかと思った。午後はピースフォーラム後、原爆資料館へ。予定時間を延長するほど、被爆資料を深く観察する生徒の姿に胸を打たれる。最終日は爆心地公園、松山町の爆心地付近をボランティアの方の説明で見学、如古堂を經由し浦上天主堂、追悼平和祈念館へ。以前、話を聞かせて下さった方の懐かしい顔に出会い一瞬息が詰まる。濃密な三日間となり、このような機会を与えてくださった事に、本当に感謝の念はつきない。感謝するだけでなく、これからの活動の糧となるよう一層努力したいと思う。

長崎派遣を終えて

習志野市立第五中学校 教諭 中村 泰希

私が今回、長崎での平和祈念式典に市の平和市民代表団の一員として参加しようと思ったのは、いくつかの強い問題意識がきっかけでした。私自身も、私が教える中学生も「戦後世代」であり、地域社会から戦争の直接の記憶が急速に失われている現実を授業や日常の中で痛感してきました。子どもたちは戦争を「過去のこと」「教科書に載る歴史」としてしか捉えられず、危うさをはらんでいます。また、世界各地の戦争の報道が小さく扱われ、人々の関心から遠ざかっていくことにも強い危機感を抱いていました。そうした現実を前に、自分自身が現地を訪れ、学び、問い続けなければ、子どもたちに平和教育を語る資格はないと感じたのです。

実際に長崎に赴き、青少年ピースフォーラムに参加して大きな気づきを得ました。運営を担っていた「青少年ピースボランティア」の中には、被爆地出身としての使命感から参加する人もいれば、知人の誘いや学校での募集をきっかけに参加した人もいました。最初から強い意識を持たなくても、活動を通じて平和について真剣に向き合っている姿に心を打たれました。若い世代が主体的に平和を考え、学び、伝えていく仕組みが存在していることは大きな希望です。

さらに、被爆体験講話で三瀬清一郎さんのお話を伺い、最も心に残ったのは「命があったからこそ体験を伝えられている」という言葉でした。この言葉をきっかけに、一人一人の命は人類全体にとって限りある大切な資源であり、その命を基に役割を果たすことで社会が存続するのだと考えるようになりました。その役割は、単なる個性の発揮にとどまらず、運命とも結びついているものだと感じました。だからこそ、命を大量に奪う戦争や核兵器は絶対に許されないのだと強く実感しました。

しかし同時に、被爆体験者は年々減少し、直接お話を伺える機会は限られています。体験に勝る学びはありませんが、そもそも戦争を体験しないことこそ最も望ましいことです。だからこそ、私たちは残された時間で証言を受け取り、その思いをどう継承し次世代につなぐかが問われているのだと思います。

教育に携わる者として、私は今回の派遣で得た学びを自分の中にとどめるのではなく、生徒たちに伝えていく使命があると感じました。命の尊さと役割を考えさせ、平和を守る姿勢を育むことこそが平和教育の根幹であり、私の責任です。派遣前に抱いた「問い続けることに意味がある」という決意を、実際の体験を通して確信へと変えることができました。これからも、長崎での学びを原点に、平和の大切さを子どもたちに伝え続けていきたいと思っています。

長崎派遣を終えて

習志野市立第一中学校 3年 沖山 隼人

今回の長崎派遣は、80年前にあった出来事の私の認識を“歴史の戦争”から“事実の戦争”にさせてくれた貴重な機会となりました。私の住んでいる地域では戦争の爪痕というものをほとんど見つけることができず、戦争は遠い存在、授業で教わるような内容だと思っていました。私が最も印象に残ったものは、被爆当時の地層です。平和公園の近くにある地層は、河原に続く階段を作ろうとした時に見つかり、そこにはレンガといった建物の一部、茶碗や栓抜きが埋まっています。80年前のあの瞬間、平穏な暮らしが瞬時に破壊されたという事実を突きつけられ、胸が苦しくなりました。また、原爆資料館で見た展示物も印象に残っており、溶けてくっついたガラス瓶、泡立った後冷えてビーズ状になったステンドグラスといった、普通ではありえないものをそのままの状態で見せていました。80年前の技術の1発の核爆弾でこの威力なら、現代の技術、それも何十発も打ち込まれたら未来永劫この土地に住めなくなると考えると寒気がしました。そんな凄惨な光景が繰り広げられた長崎市は、今では完全な復興を遂げていて、当時の地元の方々の不屈の精神と平和に対する思いを街並みから受けて、平和の尊さを改めて実感しました。一方、街から戦争の爪痕が消えて無くなってしまふことには悲しみを覚えました。確かに、市内には浦上天主堂といった被爆建物が残ってはいますが、それも何十年、何世紀も経てばいずれ失われてしまうのかもしれない。また、被爆者の方々の平均年齢は86歳を超えており、当時を知る方がいなくなる日もそう遠い未来ではないのです。だからこそ、未来に生きる私たちが、この凄惨な記憶を受け継ぎ、後世に伝えなければならないと考えています。最後に、今回の派遣に協力してくださった市役所や旅行会社の方々、そして習志野市平和市民代表団のメンバーに深く感謝をします。本当にありがとうございました。

長崎派遣を終えて

習志野市立第二中学校 3年 大澤 咲

今回習志野市平和市民代表団の一員として共に長崎派遣に参加させていただきありがとうございました。私が一番印象に残っているのは原爆資料館です。展示されているものはすべて原子爆弾の威力を表していると思いました。熱で変形したガラスびん、溶けた硬貨、爆風によって反り曲がった橋名板さらには焼け死んだ人間。80年前にこんな景色が広がっていたなんて信じたくありません。しかし式典でのインタビューや、フィールドワークを通して長崎に原子爆弾が投下されたことを実感していききましたが、同時にあの時一瞬で奪われた7万もの尊い命、そして長崎を想像すると鳥肌が止まらなくなりました。今の世界は平和な地域とそうでない地域があります。さらにそこで亡くなっている人もいます。その人たちの分まで私たちが生き、平和をつないでいかなければなりません。そのために必要なこと。大切なことを考えていきたいです。これからも精一杯がんばりますのでよろしくお願い致します。

長崎派遣を終えて

習志野市立第三中学校 3年 徳留 大希

私が派遣を終えて感じたことは「昔のことで終わらせてはいけない」ということです。3日間、さまざまな人が80年も前のことをはっきり覚えてきたまま、語っていただきました。これは、原爆がおいていった悲しみは消えることがないということを私たちに示してくれています。とても少なくなってしまう被爆者の方からいただけた話を忘れることなく、これからの生活に繋げていこうと思いました。

長崎派遣を終えて

習志野市立第四中学校 3年 大塚 湧斗

私が長崎派遣において最も印象に残ったことは、私たちが三日間を過ごしたいまの長崎の光景です。私たちは平和祈念式典に参加したり原爆資料館を訪れたりしましたが、私にとっては何気なく進んでいたあの景色、人々の生活が印象に残りました。私がそう感じた理由は、事前学習会で見た被爆直後の凄惨な都市の亡骸の写真と見比べて、いくら被爆から80年たっているとはいえ、あまりにも町がきれいだったからです。町の道路には路面電車が通り、その周りは栄え、長崎駅にはメッセや商業モール等もありました。その町並みはとても美しかったです。今回の長崎派遣を通して、自分の中での平和の定義が変わったような気がしています。辞書で平和とは何かと引いてみると戦争や紛争がなく、世の中がおだやかな状態にあること。また、そのさま。とあります。私の中での平和の意味もこんな感じでした。しかし、私が今回の長崎派遣を通して思う平和とは、何気なく進み、でもどこか楽しいそんな時間を当たり前で過ごせること。これこそが平和につながる第一歩なのではないかと思っています。今回長崎には飛行機で向かいました。しかし、これは平和でないとできないことです。1945/08/15 この日は昭和天皇によってポツダム宣言の受諾が全国民にラジオ放送を通して伝えられた日でもあり、終戦記念日ともされている日です。昭和天皇は玉音放送で国に仕えた国民に感謝を述べられたのとともにこれからどんな困難が日本に訪れようとも耐え忍び未来の平和を作ろうと述べられています。戦後80年、平和について考える機会が多くあります。私にとっての平和を書きましたが、これは主観的な平和であり、客観的な平和は未だ遠くにあるように感じます。ロシア・ウクライナでの戦争は3年がたち、中東では民族、宗教的な理由から紛争が続き、近くの朝鮮半島でもあくまで停戦であり朝鮮戦争は終戦していません。私は今回長崎に平和学習に赴くという貴重なことを経験できるチャンスをいただいたことを大変ありがたく思っています。我々、平和市民代表団のように現地へ赴いて平和について学び考えることは難しいと思います。しかし、もし、少しでも時間があるのなら、あなたの平和について考えてほしいのです。この世界で二度とあんな悲惨なことが起こらないために唯一の戦争被爆国であり、戦争を放棄した国で生まれ育った我々だからこそ平和について向き合い続けることが大切だと考えます。

長崎派遣を終えて

習志野市立第五中学校 3年 相川 和来

被爆体験講話の中で「隣に座っていた友達がいない」、「クラス皆で黙とうした」という証言を聞いた時、友達が亡くなったことと重ねました。中学一年生のときつい最近まで一緒に応援団をしたり、勉強したりしていた友達が亡くなりました。私は被爆体験講話を聞いたときは、きっとすごくクラスメイトは悲しがっていた、そう思いました。私がそうだったからです。私は泣きまくり、数日間放心状態でした。でも、講話に参加し、原爆資料館をいくなかで考えが変わりました。きっと、何も考えられなかったと思います。至る所で死体があり、だれかわからない人ばかり、すぐに火葬しなければいけない状況から、たぶん、泣いている場合ではなかったと思います。それだけ大変だった、悲惨な状況が長く続いていたと私は思いました。それを考えると胸が痛いです。

私の名前は和来、平和な未来という意味です。いつも私は名前の説明をするとき、何気なく平和の和に未来の来と説明していました。ですが、これからは「平和な未来でありたい」「平和な未来をつくりたい」そういう思いで説明します。私は派遣事業が始める前はこの名前は嫌いでした。かっこいいのが好きな私からすると、周りの人からかわいい名前と言われるので、嫌いでした。ですが、派遣に行ってから私の名前を誇らしげに思っています。名前を言われるたびに少しでも平和な未来に近づける気がするので、今ではこの名前は大好きです。

今回、習志野市平和市民代表団のメンバーとして、様々なことを五感で感じ、自分で当時の状況を想像することができました。今回、学んだことを伝え、そしてこの経験を将来活かし、私の名前のような平和な未来にしたいと強く思わせてくれました。

長崎派遣を終えて

習志野市立第六中学校 3年 千葉 光葵

今回の長崎派遣で私が一番印象に残ったことは、長崎原爆資料館です。事前学習で原爆資料館については調べていましたが、実際に行ってみると調べていたものとは全然違いました。展示されているものを見ると、当時の原爆による被害がとても大きかったことがわかりました。またガラスが熱によって溶けて変形していたり、服がボロボロになっていたり、当時の写真があったりなど原爆の悲惨さがよく伝わってきました。

アメリカの原爆による無差別攻撃により、多くの人々の命が奪われました。今の日本は戦争がなく当たり前のように生活していますが、昔のようにまだ世界では戦争をしている国もあります。そこで日本が今後も戦争をしないように、2度と過去の過ちを犯さないようにするために、今回の事前学習や派遣で学んだことを後世に伝えて、多くの人に知ってもらえるようにしたいと思います。

長崎派遣を終えて

習志野市立第七中学校 3年 原 花蓮

今回の長崎派遣は、私にとってとても貴重で多くの学びのある三日間になりました。平和祈念式典に参列し、今までテレビで見ていた時にはあまり感じていなかった緊張感が、会場では強く感じました。また、原爆資料館や平和資料館を訪れ、当時の様子を記録した写真や資料、遺品などを目にして、戦争と原爆の恐ろしさを改めて実感しました。

その中でも一番心に残っていることは、被爆体験講話を聴いたことです。実際に被爆された方のお話を直接聴くのは初めてで、生の言葉には本や映像では伝わらない重みがありました。当時の小学生は、原爆が落ちてきた時のために「親指で耳をふさぎ、人差し指と中指で目を押さえる」訓練をしていて、原爆が落とされた時とっさにそうしたという話を聞き、とても胸が苦しくなりました。今の私よりも若い年齢で見たその光景は、想像もつかないほど辛いものだったと思います。さらに、今の核兵器は、当時落とされた原爆よりも数千倍も威力があり、もし今九州に落とされたら九州がなくなってしまうと聞き、とても恐ろしくなりました。そんな恐ろしいものが今もたくさん残っていることを知り、普段の生活が当たり前ではないのだと気づきました。

そして、被爆者の方の「当たり前の生活こそが平和であり、平和は人類共通の世界遺産だ」という言葉が特に印象に残りました。私たちは毎日、家族や友達と過ごしたり、学校に通ったり、ご飯を食べたりすることを当たり前のように過ごしています。しかし、その「当たり前」は戦争や核兵器があれば一瞬で壊されてしまうものだという事に気づかされました。平和は誰かが守ってくれるものではなく、一人ひとりが意識して大切にしていかなければならないものだと思います。この言葉を聞いて、今の生活がどれだけありがたいものなのかを改めて考えさせられました。被爆者の平均年齢は86歳を超えていて、直接話を聞ける機会はどんどん少なくなっています。だからこそ、一つ一つの話大切に受け止め、次の世代へとつないでいくことが大切だと感じました。今回の派遣で学んだことを忘れず、今ある当たり前の生活がどれほど幸せなことなのか噛み締めながら、平和の実現のためにできることを考えていきたいです。

長崎派遣を終えて

習志野市立習志野高校 3年 織戸 紗代

様々な資料や写真が展示される長崎原爆資料館。そこには原爆の悲修さを後世に遺そうという過去の思いと、原爆の悲惨さを受け継ごうとする現代、今を生きる人たちの両方を見た。私も今を生きる後世の人間の一員で、私も受け継がなければいけないと思った。

日本国内外から多くの人が参列していた平和祈念式典。長崎市長の力強い平和のための宣言や被爆者の合唱などに心うたれた。感動してしまった。感動しているだけではいけない。

長崎と原爆についてや、平和について関心を持つ同年代の派遣団員たちと3日間、一緒に学べて楽しかったし、より学びが深いものになったのを感じた。

長崎派遣を終えて

習志野市立習志野高校 2年 大志民 葵

長崎の派遣を終えて私は平和の尊さについて改めて実感しました。一日目の講話をきいたとき、とても心が締め付けられるように痛かった。心臓が掴まれたみたいそんな感じで涙が出てきそうになったほどだった。この講話で一番印象に残っているのは、最後仰っていた、”平和という花の種を授けている”という言葉です。私はこの、平和の花を咲かせられるようにしたいと思った。

二日目の平和祈念式典の中の長崎市長や参列者の方々のお言葉に、一日目同様胸を締め付けられました。また意見交換会では当たり前存在する”違い”について話し合った。話し合いで導き出した私のグループの答えは、「外見だけでなく、中身もちゃんと知ること」。それだけでも大事だから、差別や偏見はしないようにしようと思った。その後、原爆資料館の資料を見たとき、いろいろな展示物に心を奪われ、感情移入してしまいとても辛かった。

最終日、三日目では原爆に関する場所を巡り、原爆が落ちた当時のことや、現在の姿を間近で見て、とてもいい体験をしたと思った。印象に残っているのは、自分の調べた永井隆さんの家です。結構狭かったが、一人で過ごすには十分な広さだと思ったし、調べた際の家の様子そのまま驚いた。

最後に、この三日間を通して、平和市民代表団の皆とも仲良くなり、平和についての理解も深められたので、とても充実した三日間だった。これからは、この派遣を通して感じたこと、知ったことをまずは近くの家族や友達に話してみようと思った。

「平和な未来をつくるために、私たちはなにができるのか？」

～団員に派遣前と派遣後でそれぞれ考えてもらいました～

派遣前

- 若い世代の考え方を邪魔しない。
- 戦争の悲惨さについてよく知り、後世へ伝えていく。
- 同じ人間という生き物同士、仲違いがあっても双方の意見を尊重する。
- 長崎で学ぶ平和への願いや、過去の悲劇から得られる教訓を、自分自身の言葉で語り継ぐ。
- 差別や偏見をなくす。
- 理不尽な制限に対してきちんと声を上げる。
- 平和の尊さについて、気軽に議論できるようにする。
- 実際に現地に足を運ぶ。
- 戦争について学ぶ、興味をもつ。
- 黙とうする。
- 歴史についてさらに深く学んでいく。
- ささいなことでも争いをなくす。
- 他の国の文化を知る。
- 日常生活で誰かが傷つくことを避けるよう行動する。
- 過去に人間たちが犯してきた過ちを繰り返さない。
- ボランティア活動への参加。
- 教育の場や日常の会話の中で、「なぜ争うのか」「どうすれば争わずにすむのか」といった問いを持ち続ける。
- そもそも平和とは何かを考える。

派遣後

- 今生きている被爆者の声を留め、思いを伝える手段を更に増やす。
- 長崎市で見聞きしたことを伝え、世界平和を訴える。
- 学校で長崎派遣の報告をして、興味をもってくれる人を増やす。
- 長崎派遣での学びを後世に伝え、自分の行動を変えていくこと。
- 原爆について家族や友達に伝える。
- 平和のために、自分には何ができるかを常に考えながら生活する。
- 平和が当たり前ではないことを忘れない。
- 「平和は大切」で終わらせない。平和を自ら学び続ける。
- 相手の意見や個性を認め合う。
- 平和募金活動に協力・参加する。
- 選挙について興味をもつ。
- よく話し合う。
- 日常の中で自分の命を大切に、他の人の命を尊重する。
- 過去のことを知る（同じことを繰り返さないために）人間が過去起こしてきたあらゆる戦争犯罪を二度と起こさないようにする。
- 平和に対する議論をして、更に理解を深める。
- 自分から知ろうとする。
- 自分が思う平和と平和でない世界を照らし合わせる。
- 嘘をなくす。（素直に話すべき）
- 喧嘩をしない（争い事を少しでも無くす）
- 差別をしない（肌の色、性別等）
- 見た目で判断しない。（中身を知るべき）
- 暴力・人を傷つけることをしない。
- 困っている人に声をかける。
- 友達に「ありがとう」を伝える。
- 今を一生懸命に生きる。
- ボランティア活動等の参加。
- 戦争中の国に寄付する。
- 第二次世界大戦や今この世界で起こっているあらゆる紛争、問題、分断について学び、知り、意見を持つ。

派遣後は「平和」という大きなテーマを「自分ごと」として捉え直しています。「誰かがやる」のではなく「自分が、身近な人（家族・友人）から伝えなければならない」という当事者意識が芽生えました。

また、「今、世界で起きていること」や「自分たちの社会参加（選挙・寄付等）」に目が向くようになり、平和を守るためには、過去を知るだけでなく、現在の行動が必要だと気づいています。特別なことだけではなく、普段からの意識・実行できることもたくさん発見しました。

「何気ない日常こそが平和である」という本質にも気づき、自分の生活と地続きのものであることを実感しています。

平和市民代表団による報告会

代表団の活動目的の一つは一人でも多くの方に派遣で学んだことを伝えることです。
派遣後、団員達は様々な報告を行いました。

『平和市民代表団 長崎派遣報告および平和基金募金活動』

10月26日(日) 福祉ふれあいまつり

習志野市役所で行われた福祉ふれあいまつり会場の一画で、派遣時の写真などをまとめた資料を展示しました。また、ステージイベントにて報告を行いました。



11月8日(土)・9日(日) 食とくらしの祭典

習志野市役所で行われた食とくらしの祭典会場の一画で、派遣時の写真などをまとめた資料を展示し、募金活動を行いました。



《その他団員による発表》

◎千葉団員・・・9月1日 第六中学校にて



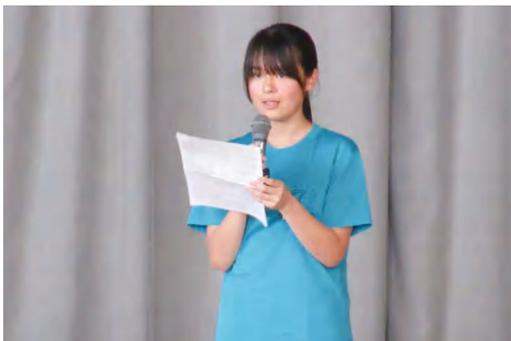
◎沖山団員・・・9月14日 第一中学校にて



◎大澤団員・・・9月21日 第二中学校にて



◎原団員・・・10月1日 第七中学校にて



◎大志民団員・・・12月4日 習志野高校にて



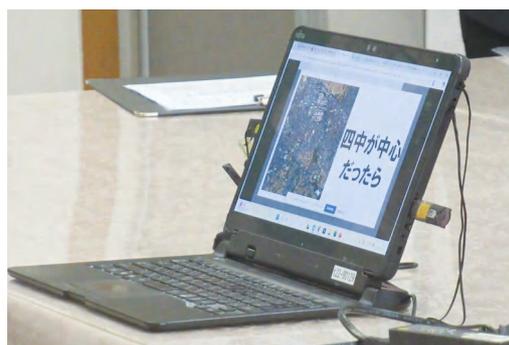
◎織戸団員・・・12月8日 習志野高校にて



◎徳留団員・・・12月16日 第三中学校にて



◎大塚団員・・・12月23日 第四中学校にて



被爆80周年
長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

資 料

式次第

被爆者合唱

開 式

原爆死没者名奉安

式 辞

献 花

黙とう

長崎平和宣言・・・69ページ

平和への誓い・・・71ページ

児童合唱

来賓挨拶

合 唱 千羽鶴

閉 式

長崎平和宣言

長崎平和宣言 1945年8月9日、このまちに原子爆弾が投下されました。あの日から80年を迎える今、こんな世界になってしまうと、誰が想像したでしょうか。

「武力には武力を」の争いを今すぐやめてください。対立と分断の悪循環で、各地で紛争が激化しています。

このままでは、核戦争に突き進んでしまう。そんな人類存亡の危機が、地球で暮らす私たち一人ひとりに、差し迫っているのです。

1982年、国連本部で被爆者として初めて演説した故・山口仙二さんは、当時の惨状をこう語っています。

「私の周りには目の玉が飛び出したり木ギレやガラスがつきささった人、首が半分切れた赤ん坊を抱きしめ泣き狂っている若いお母さん、右にも左にも石ころのように死体がころがっていました。」

そして、演説の最後に、自らの傷をさらけ出しながら、世界に向けて力強く訴えました。

「私の顔や手をよく見てください。世界の人々そしてこれから生まれてくる子供たちに私たち被爆者のような核兵器による死と苦しみを例え一人たりとも許してはならないのであります。」

「ノー・モア・ヒロシマ ノー・モア・ナガサキ

ノー・モア・ウォー ノー・モア・ヒバクシャ」

この心の底からの叫びは、被爆者の思いの結晶そのものです。

証言の力で世界を動かしてきた、被爆者たちの揺るがぬ信念、そして、その行動が評価され、昨年、日本被団協がノーベル平和賞を受賞しました。日本被団協が結成されたのは、1956年。心と体に深い傷を負い、差別や困窮にもがき苦しむ中、「自らを救うとともに、私たちの体験をとおして人類の危機を救おう」という結成宣言をもって、長崎で立ち上がりました。

「人類は核兵器をなくすことができる」。強い希望を胸に、声を上げ続けた被爆者の姿に、多くの市民が共感し、やがて長崎に「地球市民」という言葉が根付きました。この言葉には、人種や国境などの垣根を越え、地球という大きな一つのまちの住民として、ともに平和な未来を築いていこうという思いが込められています。

この「地球市民」の視点こそ、分断された世界をつなぎ直す原動力となるのではないのでしょうか。

地球市民である、世界中の皆さん。

たとえ一人ひとりの力は小さくとも、それが結集すれば、未来を切り拓く大きな力になります。被爆者は、行動でそう示してきました。

はじめの一步は、相手を知ることです。対話や交流を重ね、互いに理解し、小さな信頼を重ねていく。これは、私たち市民社会の大きな役割です。

私たちには、世界共通の言語ともいえるスポーツや芸術を通じて、また、発達した通信手段を使って、地球規模で交流する機会が広がっています。

今、長崎で、世界約 8,500 都市から成る平和首長会議の総会を開いています。市民に最も身近な政府である自治体も絆を深め、連帯の輪を広げています。

地球市民として、共感と信頼を積み重ね、平和をつくる力に変えていきましょう。

地球市民の一員である、すべての国の指導者の皆さん。

今年は、「戦争の惨禍を繰り返さない」という決意のもと、国連が創設されてから 80 年の節目でもあります。今こそ、その礎である国連憲章の理念に立ち返り、多国間主義や法の支配を取り戻してください。

来年開催される核兵器不拡散条約 (NPT) 再検討会議は、人類の命運を左右する正念場を迎えます。長崎を最後の被爆地とするためには、核兵器廃絶を実現する具体的な道筋を示すことが不可欠です。先延ばしは、もはや許されません。

唯一の戦争被爆国である日本政府に訴えます。

憲法の平和の理念と非核三原則を堅持し、一日も早く核兵器禁止条約へ署名・批准してください。そのためにも、北東アジア非核兵器地帯構想などを通じて、核抑止に頼らない安全保障政策への転換に向け、リーダーシップを発揮してください。

平均年齢が 86 歳を超えた被爆者に、残された時間は多くありません。被爆者の援護のさらなる充実と、未だ被爆者として認められていない被爆体験者の一刻も早い救済を強く要請します。

原子爆弾で亡くなられた方々とすべての戦争犠牲者に、心から哀悼の誠を捧げます。

被爆 80 年にあたり、長崎の使命として、世界中で受け継ぐべき人類共通の遺産である被爆の記憶を国内外に伝え続ける決意です。永遠に「長崎を最後の被爆地に」するために、地球市民の皆さんと手を携え、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に力を尽くしていくことをここに宣言します。

2025年(令和7年)8月9日

長崎市長 鈴木 史朗

平和への誓い

1945年8月9日、私は爆心地から3.3kmの県立長崎中学校の校舎内で被爆しました。13歳の時でした。

「敵大型2機、島原半島を西進中」という西部軍管区の放送を生徒が大声で職員室に向かって報告しているのを聞いてから、何分も経たないうちに敵機の爆音が聞こえてきたかと思うと、その音が急に大きくなりました。次の瞬間、身体がすごい光に包まれ、私は「学校のテニスコートに爆弾が落とされた」と思い、小学生の時から訓練されていたとおり、目と耳を塞いだ姿勢を取り、床に伏せました。

爆発の瞬間は、オレンジ色と黄色が混じったような光の海の中に一瞬全身が埋もれたような感覚でした。続いて、すさまじい爆風で窓ガラスが破壊され、私は部屋の隅に頭を抱えて転がり込みました。その上に級友が折り重なってきたため、その体重で息もできない有様でした。しかし私は級友たちの下敷きになったおかげで、無傷で済んだのです。級友たちはナイフのように尖った割れた窓ガラスが体に刺さり、血だらけになっていました。

さらに外を見渡すと、家々は壊れているのに火災は全く起きておらず、煙すら上がっていないのに、浦上地区には大きな火柱が上がっている。一発の爆弾だったはずなのに広範囲に被害が及んでいるのはどうしてかと、不思議に思いました。

その後、学校の防空壕に二時間ほど避難していたでしょうか。もう大丈夫だろうと、帰宅の途についた道は避難してくる人たちであふれかえっていました。

火傷か切り傷なのかわからない血まみれの男性。顔から血を流している赤ちゃんを抱いて歩く母親。腕が切れて垂れ下がっているのではないかと思われる人。こういう人々が中川町から蛍茶屋の方向に群れをなして歩いてくるのです。薄暗い雲が長崎の空一面を覆い、辺りは夏の真昼だというのに、あたかも日食のようでした。

こうして8月9日が過ぎ、戦争が終わりました。この爆弾が原子爆弾というものだと知らされたのは戦争終結後のことでしたが、原爆の恐怖はさらに続きました。それは原爆による後遺症です。爆心地付近にいたけれども、頑丈な塀で守られ、軽傷で済んだ人や、地下工場です仕事をしていて無傷で帰宅した人たちもいました。ところが、それらの幸運な人たちも、次第に歯茎から出血し、髪の毛が抜け落ちて次々に亡くなっていったのです。薬もなく、治療方法も分からず、戦争が終わったというのに原爆は目に見えない恐怖をもたらしたのです。

昨年、私が所属する「日本被団協」がノーベル平和賞を受賞しました。これは私たちの活動が世界平和の確立に寄与していることが評価されたということに他なりません。そして、この受賞を契機として、世界中の人々が私たちを見てくれていることに大きな意義を感じました。

平和に繋がるこの動きを絶対に止めてはいけない、さらに前進させよう、そして、仲間を増やしていくことが、私たちが目標とするところです。

絶対に核兵器を使ってはならない、使ったらすべてがおしまいです。

皆さん、この美しい地球を守りましょう。

2025年（令和7年）8月9日

被爆者代表 西岡 洋

參考資料



習志野市原爆死没者慰霊および平和祈念式典

習志野市では、毎年8月6日、9日の原爆投下時刻に合わせて下記のとおり『原爆死没者慰霊および平和祈念式典』を新習志野公民館並びに秋津公園内「平和の広場」で実施しています。

その式典の中で、習志野市平和市民代表団OB・OGによるスピーチ及び平和の詩の朗読を行っています。（全文を次ページ以降に掲載）

現地を訪れた当時の思いは、今も習志野市平和市民代表団OB・OGの胸の中に強く残り、戦後世代の平和継承者として、より多くの方々に戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを語り継いでいく活動を続けています。

※どなたでも御参加いただけます

- ・黙とう（原爆投下時刻、全市域一斉）
- ・習志野市平和市民代表団OB・OGによる平和への思いのスピーチ、平和の詩の朗読
- ・花輪、千羽鶴の献納（市長、議長、被爆者の会、市民代表ほか団体・個人受付可）
- ・習志野市原爆被爆者の会による献水
- ・参列者全員による「広島」「長崎」モニュメントへの献花

日 時

広 島	毎年	8月6日	午前	8時13分～	（原爆投下時刻 8時15分黙とう）
長 崎	毎年	8月9日	午前	11時00分～	（原爆投下時刻11時02分黙とう）

※両日30分程度で終了いたします。

場 所

新習志野公民館 2階 多目的室（式典）
秋津公園内 平和の広場（献花・千羽鶴の献納）



令和7年8月6日

習志野市原爆死没者慰霊および平和祈念式典によせて

—平和祈念のスピーチ—

令和6年度 平和市民代表団（広島派遣）団員 中村 由佳

私は昨年、習志野市平和市民代表団の一員として広島へ行かせていただきました。広島では平和記念資料館の見学や平和記念式典の参列、他にもさまざまなことに参加させていただき原爆の悲惨さをすごく感じました。被爆者の方からの話では実体験を聞くことができとても貴重な経験になりました。平和市民代表団は中学生7人と高校生2人の9人という例年より多い人数でしたので事前学習などでたくさん調べ多くの意見がでてきてとてもよかったなと思っています。

私はこの貴重な経験を通して平和の大切さを再認識しました。過去の悲劇を忘れず未来にこのようなことが二度と起きないように一人一人が戦争の恐ろしさを理解し平和のために何ができるかを考える必要があります。私が学んだことをみなさんに共有することで少しでも平和への意識が広がることを願っています。



令和7年8月6日

習志野市原爆死没者慰霊および平和祈念式典によせて

—平和祈念の詩—

令和6年度 平和市民代表団（広島派遣）団員 木堂 亜衣理
（代読 令和6年度 平和市民代表団 団員 中村 由佳）

「悲しみではなく笑顔をつなぐ」

あの日の空は 焼けていた
今の空には 鳥が飛ぶ
私たちは 拳をにぎらない
この手でにぎるは 誰かの手
この空の下で 誓いあう
今ここにある 平和を守ると



令和6年8月9日

習志野市原爆死没者慰霊および平和祈念式典によせて

—平和祈念のスピーチ—

令和5年度 平和市民代表団（長崎派遣）団員 豊沢 咲奈

私は二年前、習志野市の平和市民代表団の一員として、長崎を訪れました。当時は台風の影響で、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列することは叶いませんでしたが、被爆地で学び、感じたことは今も心に深く刻まれています。

長崎原爆資料館では、被爆者の衣服や持ち物、写真を目の当たりにしました。そこには、教科書やインターネットだけでは知り得ない、一人ひとりの人生の重みと、原爆の悲惨さが確かに刻まれていました。また、被爆体験をお話くださった方は、80年経った今も、あの瞬間を鮮明に覚えていらっしゃいました。体験者の方の言葉には、文字や映像だけでは伝わらない現実があります。

戦争の恐ろしさを肌で感じ、直接思いを受け取った私たちは、その記憶を風化させることなく、次の世代へと伝えていかなければなりません。戦争がない世界を平和と呼ぶだけではなく、未来へ平和を語り継ぐために、真の平和とは何かを問い続け、考え続けることが求められていると感じています。

結びに、原爆で尊い命を奪われたすべての方々に、深く哀悼の意を表し、私のスピーチといたします。



令和6年8月9日

習志野市原爆死没者慰霊および平和祈念式典によせて

—平和祈念の詩—

令和5年度 平和市民代表団（長崎派遣）団員 恩田 智己
（代読 令和5年度 平和市民代表団 団員 豊沢 咲奈）

「継承の詩」

伝えよう

80年前何があったのか

伝えよう

被爆者の声

伝えよう

あの悲惨な状況

伝えよう

当時の思い

伝えよう

繰り返さないために

行動しよう

私たちに出来ること

守り繋げよう

私たちの平和を



一 習志野市平和市民代表団 OB・OG の活動 一

* 秋津公園内「平和の広場」の清掃活動 *

毎年、習志野市原爆死没者慰霊および平和祈念式典の会場である「平和の広場」の清掃活動を、有志の市民の方と一緒にしています。

清掃活動は、どなたでもご参加いただけます。広報習志野にて詳細をお知らせしています。(令和7年度は広報習志野7月1日号に掲載。)

○日 時：7月下旬(令和7年度は7月25日(金)に実施)

午前9時30分～(1時間程度)

○場 所：秋津公園内「平和の広場」(新習志野公民館脇)



清掃後は交流会が行われ、令和7年度の平和市民代表団員たちはOB・OGからアドバイスをもらいました。

* 習志野市原爆死没者慰霊および平和祈念式典での平和スピーチ・詩の朗読 *

毎年8月6日、9日に実施されている習志野市平和祈念式典の中で、OB・OGによるスピーチ・詩の朗読を行っています。

戦後世代の平和継承者として、式典に参列された市民の方々へ、被爆地へ実際に赴いた体験を生かし、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを訴え、より多くの方々の平和に対する意識の啓発を担っていこうとするものです。

※令和7年度のスピーチの内容は、74ページをご覧ください。

* 「習志野市平和基金」募金活動 *

市で開催される各種行事の会場で、習志野市平和基金の募金活動を行いました。今後も平和活動の一端として継続して実施していきます。

○主な行事（日付は令和7年度実績）

- ・ 8月6日、9日
「習志野市原爆死没者慰霊および平和祈念式典」
- ・ 10月26日
「福祉ふれあいまつり」
- ・ 11月8日、9日
「食とくらしの祭典」



募金活動に併せて、令和7年度の長崎派遣の様子を展示しました。

**平和基金のPRのため、令和7年度平和市民代表団が
ポケットティッシュのデザインと標語を考えました。**



＜標語＞

受け継ごう 平和の花咲く 未来へと

※ OB・OGの皆さんの平和事業へのご協力をお待ちしています。
ご協力いただける方は、事務局へご連絡ください。

事務局：習志野市 協働経済部 協働政策課
TEL 047 (453) 9301 FAX 047 (453) 5578
Eメール kyodo@city.narashino.lg.jp

習志野市平和事業のあゆみ

核兵器廃絶平和都市宣言 昭和57年8月5日

第二次世界大戦の終結後、核兵器の威力は列強の注目するところとなりました。米ソの冷戦に端を発して、核兵器の開発や核軍拡競争が次第に激しくなり、世界中の人々が核戦争への危機感を高め、反戦反核運動が広がりました。日本においても全国的に運動が広がり、昭和57年には各地で「核兵器完全禁止と軍縮に関する陳情」が出され、市町村の「核兵器廃絶・平和の宣言」として実を結びました。

本市では、昭和57年8月5日、県内で初めて、平和の実現は市民生活の最も基本的な基盤であるとして、議会の承認を経て宣言しました。

※宣言全文は1ページにございます。

原爆死没者慰霊および平和祈念式典 昭和57年～

「核兵器廃絶平和都市宣言」を契機に、毎年8月6日、9日の広島・長崎原爆投下時刻に、防災行政無線により市民に呼びかけ、原爆犠牲者を追悼し世界平和を願って黙とうを捧げています。

昭和63年に、秋津公園内「平和の広場」で、市の主催による平和を祈念する式典を挙行して以降、毎年、たくさんの市民が集まり、黙とうと献花を行います。捧げられた千羽鶴は、広島市あるいは長崎市へ派遣される平和市民代表団へ託し、被爆地の祈念像等に献納しています。平成22年から、習志野市原爆被爆者の会に献水をお願いしています。また、令和4年度より新習志野公民館2階多目的室にて式典（黙とう、スピーチ等）を行った後、秋津公園内「平和の広場」へ移動し献花・献水・千羽鶴の献納を行う形へと変更いたしました。

平和映画会・講演会等の開催 昭和57年～平成13年

平和思想の土台となる「豊かな心」を培い、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを次の世代に伝えていくことを目的に、映画会を開催しました。また、市制施行や核兵器廃絶平和都市宣言の周年記念事業として、反戦反核、国際貢献などをテーマとした講演会やコンサートなども開催しました。

核兵器廃絶平和都市宣言記念展・核関係図書コーナーの開設 昭和57年～



毎年、核兵器廃絶平和都市宣言日の前後に、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを次の世代に伝えるとともに、平和について考える機会を提供するため、市内の公民館・図書館等で原爆写真・被爆者の描いた絵や市内の絵手紙サークルの皆さんが平和を想い描いた絵手紙、平和への願いを込めて作成していただいた千羽鶴等を展示しています。

平和祈念標語コンクール 昭和61年

市内の小・中学生・高校生から、核兵器の廃絶と平和をテーマとした標語を募集し、寄せられた741点の作品から、15点が市長賞などに選ばれました。市長賞の作品は、市役所やJR津田沼駅前に掲げられ、人々に平和の尊さを呼びかけました。

平和の広場の整備 昭和62年～

秋津公園の一画に、平和ゾーンが造られ、昭和63年3月旧広島市庁舎の被爆壁を組み込んだモニュメントを設置しました。平成元年7月には、長崎市立山里小学校校舎の被爆壁のモニュメントを併設しました。また、平成2年7月には、広場の表示を兼ねた「核兵器廃絶平和宣言都市」の文字塔を広場の入り口に設置しました。これらを含めてこの広場は、非核三原則を表す三角形をモチーフにしてデザインされています。周辺には市民の名前や絵などが入ったレンガやタイルがあり、市民の憩いの広場となっています。



広島・長崎原爆写真・被爆者の描いた絵の貸し出し 昭和62年～

広島市平和文化センターから提供された広島・長崎の原爆写真や被爆者の描いた絵を学校や団体に貸し出し、市民による原爆展開催を呼びかけています。

核兵器廃絶平和都市宣言記念塔と宣言文の掲示 平成4年～

宣言10周年を記念して、本市の平和への取り組みを内外にアピールするため、平成4年8月に習志野市の玄関であるJR津田沼駅南口広場に、「核兵器廃絶平和宣言都市」の文字塔を建てました。右下部の赤三角は核の脅威を表し、青タワー部は人類が目指すべき平和への道が上に向かって無限に伸びていこうとする様を表しています。青タワーの下部の折れは、核兵器廃絶への取り組みが10年目の節目であることを表現しています。また、市内の公共施設ロビー等に宣言文を掲示して市民への周知につとめています。

被爆65周年にあたる平成22年には、宣言文が破損し、取り外していた公民館へ再度配布し、全公民館に宣言文を設置しました。



平和ポスターコンクール 平成4年

宣言10周年記念事業として、平和の理念を次世代に引き継ぐため、市内小・中学生を対象にポスターを募集しました。265点の応募作品の中から、19点が市長賞などに選ばれ、市役所・公民館等に展示されました。

平和祈念文集『あしたへの誓い』発行 平成5年

風化しつつある戦争体験を記録し、平和教育に活用することを目的として、市民から寄せられた60編の戦争体験文、小・中学生・高校生64名の平和祈念文を文集にまとめ、市内小・中学校・高等学校・大学・図書館等に配布しました。

平和の語り部事業 平成6年～平成7年

市制40周年の平成6年度・戦後50周年の平成7年度の2ヶ年にわたり、学校教育の中で、戦争体験文集に寄稿した市民から中学生に戦争体験を直接語り継ぎ、平和教育の充実を図りました。

平和基金の創設 平成7年4月1日

戦後50周年記念事業として平和基金を創設しました。平和事業の安定継続を図ることを目的に、市の拠出金（平成11年度まで）と市民からの寄付金を積み立てています。平和を愛する心を大きく育て、次世代に継承していくために平和事業の財源に充てています。

広島市・長崎市へ平和市民代表団派遣 平成7年～

戦後50周年を記念し、市内の中学生・高校生を中心とした平和市民代表団を被爆地である広島市・長崎市に隔年で派遣し、現地の平和式典に参列することを大きな目的として、次世代の平和の継承者を育てていこうとするものです。本報告書にもあるとおり、戦争を知らない世代が、現地で被爆関連施設の見学や、被爆者の方から直に話を聞く等の体験を通して被爆当時の実相に触れ、その悲惨さを肌で感じ取ることで、今ある平和を大切に、平和のために自分たちに何ができるかを考え、周囲へ、次世代へ彼らの思いを発信しています。

令和7年度末現在	被爆者の会	中学校教員	中学生	高校生	大学教授	計
広島派遣	15	16	45	35	1	112
長崎派遣	17	16	40	33	0	106
計	32	32	85	68	1	218

令和6年度平和市民代表団の派遣の様子



核実験抗議文の送付 平成7年6月～

平成7年に、包括的核実験禁止条約（CTBT）成立に向けて、国際的な核軍縮の取り組みが進んでいた中、フランスが核実験の再開を決定したことに對して抗議文を送付しました。以来核実験等を行った国（アメリカ、イギリス、ロシア、インド、中国、パキスタン、フランス、北朝鮮）に対し、市民を代表して各国大使館宛てに抗議文及び実験中止要請文を送付しています。

被爆学生服の展示 平成9年4月～

昭和20年8月6日、広島で被爆し、亡くなられた立本昇さん（当時22歳）が着用していた学生服を、生前は藤崎にお住まいだった立本英機さんより寄贈されました。現在は市役所ロビーに展示しており、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを訴える資料として市民の皆様に公開しています。



市の平和事業紹介ビデオ、DVDの製作、貸出 平成11年度～

本市の実施している平和活動推進事業を広報番組「なるほど習志野」の特別番組としてJCN船橋習志野とともに製作したものです。内容は、広島・長崎市派遣の平和市民代表団の報告を中心として、本市の平和祈念式典等を紹介、市民の皆様へ平和を訴えました。製作したビデオ、DVDは、学校や平和活動を行う団体、個人へ貸し出しを行っています。図書館でも貸し出ししています。

長崎被爆体験講話 平成15年9月7日

戦争の悲惨さと平和の尊さを多くの市民の方に受け継ぐため、浦安市協力のもと長崎市より被爆体験者を招き、講演会を開催しました。講師には、当時16歳で被爆し、妹と弟を原爆で亡くした、永野悦子氏（長崎平和推進協会継承部会員）を招きました。

被爆2世の苗木植樹式 平成16年8月9日



広島「永遠の木」 長崎「平和の木」

市制施行50周年を記念し、戦争体験を継承し、平和の尊さ、命の大切さを伝えていくために、被爆2世の苗木として広島市よりアオギリを、長崎市よりクスノキを譲り受け、「永遠の平和」を願いそれぞれ「永遠（とわ）の木」「平和の木」と名付け平和の広場に植樹しました。

被爆体験講話 平成17年7月～10月、平成20年度～

戦争体験者が年々少なくなっていく今日、戦争・被爆体験講話を通じて少しでも多くの若い世代に戦争や核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを認識してもらうと共に、平和意識を育てていくことを目的とし、平成17年に戦後60周年事業として「平和の語りべ」を習志野市原爆被爆者の会会員のご協力により市内中学校7校で生徒及び保護者を対象に実施しました。

平成20年度より「平和を語り継ぐ出前講座」として小・中学校を中心に毎年実施しています。平成23年度より事業内容をわかりやすくするため、「被爆体験講話」と名称を変更しました。



平和首長会議への加盟 平成22年6月1日

本市では、戦後65周年という節目であり、平成22年5月にNPT再検討会議が開催され国際的にも核兵器廃絶を求める声がさらに高まっていたこと、また平成21年習志野市議会第4回定例会では「非核三原則の法制化を求める陳情」が全会一致で採択され習志野市民・市議会の核兵器廃絶・平和への関心が高かったことから、平成22年5月12日に加入申請書を提出し、6月1日付で平和市長会議（現在の平和首長会議）へ加盟しました。

平和首長会議とは

昭和57年6月の国連軍縮特別総会において、広島市長が世界の都市を越えて連帯し、共に核兵器廃絶の道を切り拓こうと呼びかけ、この趣旨に賛同する世界各国の都市で構成された団体です。平成25年8月には、その活動を市以外の町・村・特別区等へさらに広げていきたいという思いのもと、名称を「平和市長会議」から「平和首長会議」へと変更し、令和7年2月1日現在、166カ国、8,459都市、千葉県内では全54市町村が加盟しています。

被爆体験講話 DVD の作成とホームページでの配信 平成25年3月～

平成24年度に「核兵器廃絶平和都市宣言」30周年を記念して、習志野市原爆被爆者の会のご協力により、被爆体験講話を通じて少しでも多くの若い世代に戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを認識してもらおうと共に、平和意識を育むことを目的に、被爆体験講話をまとめたDVDを制作しました。完成したDVDは、市内の図書館で貸し出しするほか、習志野市ホームページでも視聴いただけます。

戦後70年記念事業 平成27年7月2日、10月3日

長い年月を経る中で風化していく戦争の記憶。平和であるが故に潜んでいる危険。今後も平和な未来を守り続けていくために、私たちは何をしなければならないのか。

戦後70年を記念して「過去」と「未来」の二つの視点から記念行事を行いました。

【次世代への継承】 7月2日 習志野文化ホール

市内市立全中学一年生を対象に、戦争を知らない若い世代に平和に対する認識を深め、平和の大切さを考えるきっかけとするため、朗読劇「夏の雲は忘れない - ヒロシマ・ナガサキ1945 -」を習志野文化ホールで上演しました。

【未来への警鐘】 10月3日 習志野文化ホール

身近な関係性に焦点を当て、読売新聞特別編集委員橋本五郎氏をお招きし、「家族や地域で語り合う『これからの平和』～無関心社会への警鐘～」をテーマに講演会を開催いたしました。

核兵器廃絶平和都市宣言40周年記念事業 ポスターデザインコンテスト 令和4年

核兵器廃絶平和都市宣言40周年記念事業として、「あなたが願う平和な未来」をテーマに描くことをきっかけに、平和について深く考える機会となるよう市内在住・在学の6歳から18歳を対象としたポスターデザインコンテストを開催いたしました。応募総数114点の中から、12点の作品が市長賞・議長賞・教育長賞に選ばれ、表彰されました。後日、モリシア津田沼2階に展示を行いました。

戦後80年記念事業 令和7年度

戦争を知らない若い世代を対象に市内市立小・中学校計23校で、被爆体験講話による原爆被害の概要説明及び朗読を行いました。戦争や核兵器の恐ろしさ・平和の尊さを認識していただくと共に、平和意識を育み、平和意識の高揚を目的としています。



長崎平和公園内「平和の泉」

— 令和7年度（戦後80年）—
習志野市平和市民代表団 長崎派遣報告書

未来へ平和を語り継ぐ29

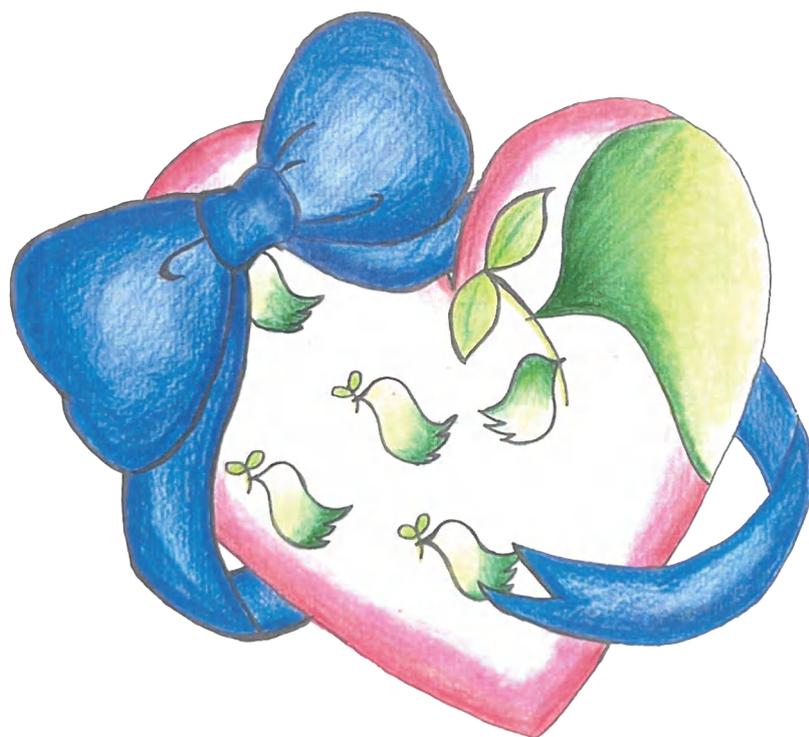
令和8年3月発行

編集 令和7年度習志野市平和市民代表団

発行 習志野市

〒275-8601 習志野市鷺沼2-1-1

電話番号 047(451)1151(代表)



「受け継ごう 平和の花咲く 未来へと」

※デザイン、標語は令和7年度
平和市民代表団が作成しました。